

一路白頭二至ル

|       |                                            |
|-------|--------------------------------------------|
| 奨励    | 越川 弘英〔こしかわ・ひろひで〕                           |
| 奨励者紹介 | 同志社大学キリスト教文化センター副所長<br>同志社大学キリスト教文化センター准教授 |
| 研究テーマ | キリスト教の実践神学（礼拝・宣教・牧会）                       |

あなたの神、主の戒めを守り、主の道を歩み、彼を畏れなさい。

（申命記 八章六節）

This One Thing I Do

「一路白頭二至ル」とは、“This One Thing I Do” という言葉を留岡幸助が意識したものです。  
“This One Thing I Do.”

すなわち、「このひとつのことを私は行う」、「この一事に努める」という言葉であり、留岡はそれを「白髪になるまで、年老いるまで、このひとつの道を歩みつづけよう」、すなわち「一路白頭二至ル」と意識し、自らの生涯の座右の銘としました。

留岡幸助がこの言葉を知ったのは、初めての渡米で、アメリカにおける監獄の実態とその改良について学んでいた時期のことでした。五十年以上にわたって監獄の改良事業に身を献げてきたブロックウェーという人物から、この言葉を教えられたのです。

長年にわたるこのブロックウェーの思想と実践、すなわち、それまでのような「懲罰主義」や「犯罪者は先天的に問題がある人間だ」といった考え方は異なり、良い修練と教育を与えるなら人は犯罪など犯すものではないという信念に立つ彼の思想と実践は、日本での留岡の監獄改良事業にも受け継がれていきました。そして留岡はやがて、そうした犯罪を芽のうちに摘み取るためにも、子どもの時代からの感化教育が重要であるという信念のもと、いわゆる当時の非行少年たちを集めた「家庭学校」という施設を作り、家庭的な雰囲気のもとで生活のすべてを共にするという、当時としてはまったく新しい試みを開始することになったのです。

同志社初期の卒業生一人であり、社会福祉の分野で活躍したこの留岡幸助の名前は、皆さんもどこかで聞いたことがあると思います。彼は、今も申しましたように、監獄の改良事業、そして少年の教育感化事業などに力を尽くした人であり、今日も北海道の遠軽には「北海道家庭学校」という施設が存在します。

留岡は、この「一路白頭二至ル」だけでなく、松尾芭蕉の「此道や行く人なしに秋の暮れ」という句を好んで口ずさんだと伝えられています。どちらも「路」や「道」という言葉が出てきますが、たしかに留岡の生涯は、単に比喩的な意味にとどまらず、北海道をはじめ日本の各地を実に足繁く訪れ、先人たちがまだ踏み入れたことのなかった分野に足を踏み入れ、自ら新しい道を作っていった生涯でありました。

彼が生まれたのは一八六四年、元治元年といえますから、ちょうど新島襄が函館から日本を「脱国」した年です。

岡山県の高梁に町民の子として生まれ、早くから留岡金助という米屋の家の養子にもらわれていきました。「留岡」というのはこの養子となった家の名です。

留岡の生涯を語るとき、しばしば引き合いに出される少年時代のエピソードがあります。それは八歳ごろの出来事で、当時はすでに明治となっており、士農工商という江戸時代の身分制度はなくなったことになっていたのですが、実際には意識の上からも生活習慣の上からも、まだまだそうした実態が色濃く残っていた時代のことです。

今で言えば「小学校」の帰り道で、留岡幸助と一人の少年がけんかを始めました。相手が木刀で殴ってきたので、幸助はその手にかじりつき、けんかは幸助の勝ちとなりました。しかししけた少年は武士の家、士族階級の子ともて、翌朝、留岡の父親がその家に呼ばれました。その家の主人は、自分の子どもの手に残った歯形を見せ、町民にすぎない幸助が士族の子に何ということをするのかとなじり、米屋である留岡の出入りを止める、つまりもうお前の家からは米を買わないと告げたと言います。

幸助の養父は家に帰ると、幸助を呼び、お前のおかげで得意先が一件減ったと怒り、幸助を折檻しました。

子どもながらに幸助は、大人の世界の理不尽さと思うと共に、士族とか町民という身分をあげつらった理屈にも怒りを覚えたようです。実に六十年以上も経った後、キリスト教徒としての五十年間の歩みを感謝して開いた集いのなかで、留岡はこの少年のときに感じた憤懣を語っています。よほど悔しかったのでしょう。

「私もキリスト教を信じます以前は、むかつ腹を立てる癖がありました。（中略）子どもには子どもの理屈がありましてどうにも私が悪いと思われぬ、悪くない自分を木刀でなぐるからやむを得ず食いついたのだ。（中略）一体この世の中はどうなっているんだい。こう言う感じを抱いたのであります」（『キリストの証人たち〜地の塩として 3』一七二頁）。

留岡幸助とキリスト教

こうした留岡の向こう気の強さというのは終生のものだったようで、何ごとによらず、その人生はタフでバイタリティにあふれたものであり、自分一個の信念を貫き通すというイメージがつきまといます。頑固一徹という感じであり、往々にして、独善的なのではないかとすら思われるところのある人間にも見えるのですが、しかしそれが利害損得を越えた無私のところから発するぶんだけ、ユニークでもあり、またユーモラスに感じられる面もあるという人物でありました。

この留岡が十六才のとき、町に「西洋の軍談講釈師」が来たということで、彼は喜んで友だちと一緒に出かけていきます。もともと彼はこうした講釈とか芝居が大好きだったようで、とりわけそのときは西洋人が語るというので物珍しさも手伝って駆つけついていたようです。

そこでは一人の西洋人がたどたどしい日本語で語り、また二人の日本人が短く語ったと言います。幸助は四、五回、この講釈に通ううちに、それが「軍談講釈」ではなく、キリスト教の伝道説教であることに気づきました。それまで気づけなかったというのも、どうかしているように思いますが、ともあれ、この勘違いが契機となって、彼はキリスト教に出会うこととなります。

そのときの西洋人というのがオーティス・ケーリー、日本人の一人は同志社を出たばかりの金森通倫（みちとも）でした。

幸助にとって忘れられない言葉となったのは、「神の前に出る時には、士族の魂も、町民の魂も、皆同じ価値しかない、平等である」という意味の説教の一節だったと言います。当時は「講義所」と言っていたようですが、現在の教会あるいは伝道所にあたるところに通い続けるうちに、幸助は洗礼を受けてキリスト教徒になることを決意します。洗礼を受けるためには、口頭の試験というか、面接を受けて自分の信仰と志を表明することが求められていました。

その場で、ある人が幸助に質問をしました。「君は子どものころから儒教の教えを学んできたというが、どうして今さらキリスト教が必要だと思うのか」という問いです。

これに対して幸助は、おおよそ、「たしかに自分には必要ないかもしれない。しかし、聖書は仮名が振ってあって教養のない愚かな人間たちにも分かりやすいし、そういう人たちを導くにはたいへん都合がいいように思う」という意味の答えを返します。

「上から目線」どころではない、この傲慢無礼な返答は試験官を激怒させ、幸助は直ちに「落第」となりました。このあと改めてキリスト教について学び直すことになった幸助は、結局、翌年の一八八二年、ようやく洗礼を受けることを許され、高梁キリスト教会において同志社出身の上代（かじろ）仮牧師から受洗します。十八才のときのことです。井上勝也先生のお調べになったところでは、それは教会創立二回目の洗礼式であり、留岡と共に六人の人が洗礼を受けたと言います。

たしかにこのときの留岡の答えは傲慢であり、後々になっても留岡幸助のキリスト教には罪意識が希薄であると批判する人があったとも伝えられています。留岡自身の信仰、彼の内面がどんなものだったのか、私はまだ十分に学んでいないので何とも言えないのですが、しかし偶然というか必然というか、このとき、幸助がおそらくはあまり深く考えないで語ったように思えるこの言葉、つまり「自分のためというよりは、世のため人のために役立つからキリスト教に入信する」という言葉は、奇しくも彼の後年の生き方に繋がっていく言葉となっていました。

キリスト教の有用性？

キリスト教が社会的に有用であるからこの宗教を奉じるという考え方は、ある意味、実に功利的であり実用主義的な態度と言えるでしょう。こうした考え方はほんものではない、それはキリスト教を利用しているだけであって、真実の信仰ではないという批判があります。私もそう思います。

しかしまた、実際に私たちの人生や生き方に影響を及ぼさないような信仰なら、果たしてそこに何の意味があるのか、それが本当のキリスト教と言えるのかという問いも当然起こってきます。それを敷衍（ふえん）していけば、キリスト教という信仰に基づいて生きようとするときに、他者の問題、隣人の問題、広くは社会や時代の問題に関心を寄せないような信仰、そんなキリスト教とはいったい何なのか、それがキリスト教と言えるのか、という問いも出てきます。

明治期のキリスト者たちのなかには、良かれ悪しかれ、キリスト教信仰と社会の問題を直接的に結びつけた問題として理解し、その点を強調する人びとが何人も出てきました。そのなかには、今も言ったように、結果的にであれ、キリスト教を社会のために利用するというような立場に立った人たちもいなかったわけではありません。

実際、新島襄自身、「同志社大学設立の旨意」（一八八八年）のなかで、「良心を手腕に運用する人物」の育成をはかるために同志社を設立したと記しています。その文脈のなかで、「すでに人心を失っている儒教」では徳育の役に立たないので、その代わりに（という言葉は新島は直接使いませんが）と言わんばかりに、「ただ神を信じ、真理を愛し、他者に対する思いやりの情に厚いキリスト教」によらなければならないと信じて、「キリスト教主義を徳育の基本とした」と書いています。

これも読みようによっては、新島のめざす徳育教育に都合が良いので、儒教ではなくキリスト教をもってきたと読めなくもない書き方だと言えるでしょう。

もちろん私は新島という人がそんな都合主義の人物であったとは思いませんし、他の色々な文書やエピソード、殊に新島の他者に対する態度を見ると、彼のキリスト教信仰とい

うものは一本の太い筋の通ったものであったと考えています。

要するに、誤解をおそれずに言えば、その人のキリスト教信仰がほんものであるならば、それはその人自身の人格や人生に必ず影響を及ぼすのみならず、その人の周囲の人びと、また広くはその人が生きている社会に対しても、何らかのかたちで必ず影響を及ぼすはずであるという信念が、新島にも留岡にもあったということなのだろうと思います。

それがどのくらい社会の変革に役立ったかとか、その人の人格や人間関係を変えたかということだけで、キリスト教信仰を計るというのは、たしかに間違いなのですが、しかしまた良き信仰は良き果実を生む、それは副産物として良き行為を生み、良き人間性を育むことがあるという理解は否定すべきことではありません。

## 留岡幸助と同志社

さて、洗礼を受けてキリスト者となった幸助を待っていたのは、養父からの激しい反対、そして迫害でした。詳細は省きますが、当時まだまだキリスト教に対する世間の偏見は激しい時代であり、留岡が属していた高梁教会にはしばしば石が投げ込まれたりして、今でもそのなかのひとつ、かなり大きなものが「迫害石」という名前でこの教会には残されているそうです。

紆余曲折のあけく、幸助は高梁の家を親に無断で出て、一八八三年二月、京都の同志社にやってきます。

新島襄は十九歳の青年・留岡幸助に初めて会ったときのことを日誌にこう書き留めました。

「明治十六年三月二十八日、備中高梁の富岡幸介（ママ）なるもの、父の迫害を蒙りしに、能く脱走して此地に来る」。

函館から日本を「脱国」した新島とは比べものにならないかもしれませんが、留岡にとっては、初めて親元を離れ、故郷を捨てて、彼一箇の人生へと踏み出した道、その後に続いていく長い人生の旅路において、最初にたどり着いた場所が京都であり、この同志社でした。

留岡はこのとき、正式に同志社に入学したわけではなく、言わば「もぐり」のような存在として、すでに学生となっていた同郷の友人から食べ物を分けてもらいながら、「三十番教室」と呼ばれた、このクラーク館のすぐ脇にあった教室兼学生寮で寝泊まりしたと伝えられています。

このときの家出はまもなく親にかぎつけられ、無理矢理、家に引き戻されるのですが、やがて幸助は再び家を出て、今治へ行き、やがてもう一度京都に来て、正式に同志社の学生となります。彼は在学中に監獄の問題とその改良の事業に打ち込んだジョン・ハワードという人物を知り、この方面への関心を抱くこととなりました。

同志社の草創期の同志社の学生たちの生活を描いた徳富蘆花の小説などにも、留岡はちょっとだけ仮名で登場してきます。

留岡は卒業後、丹波第一教会（現・丹波新生教会）の牧師として京都北部で活動し、その後、監獄の囚人たちのために働く教誨師（きょうかいし）として北海道へ移り、さらにアメリカへ渡って学び、帰国後は日本各地で福祉事業のために働き続ける一生を送ることになります。

今日お話ししたのは、留岡幸助の波乱に富んだ生涯の始まりのところにすぎません。留岡が生涯にわたってもち続けた社会と福祉への関心に初めて開眼したのは同志社在学中のことでした。同志社でのそうした原点から始まって、「白頭」にまで至る一本の道を歩み通すという生き方を貫いた留岡幸助という人物が、私たちの先輩の一人として存在したことを、皆さんにもぜひ覚えておいていただきたいと思います。

二〇一〇年十一月二日 同志社スピリット・ウィーク  
火曜チャペル・アワー「奨励」記録